

## 歴史的思考における“根拠”と解釈の在り方

### 1. 工夫されていた点

まず1点目は、子ども達が基本的な歴史的事項を踏まえながら、話し合いを進めていた点である。例えば、ポルトガル人、南蛮貿易、キリスト教、火縄銃、鉄砲、その他織田信長と豊臣秀吉の天下統一に関わる事項を子ども達は理解し、その知識に基づいた歴史的思考、そして議論を展開していた。歴史学習が知識偏重、暗記中心と指摘されて久しいが、逆にそれを改善するための歴史教育論も様々な提起がなされてきた。例えば、千葉県の公立高校に長く勤務し、歴史教育者協議会の代表的実践者でもあった加藤公明は“考える日本史の授業”を提起し、「加曾利の犬」をはじめとしたさまざまな実践を示してきた。今回の授業も、こうした“考える日本史の授業”を彷彿させるような、歴史的思考と対話的な学びが展開されていた。

2点目は、これと関連した思考の可視化である。本授業の中心的学習活動は、グループにおける話し合い活動であった。それぞれの意見をホワイトボードを活用しながら書き出し、またそれぞれの事項を結び付け関連させながら構造化していく。いわゆる内言の外言化を繰り返しながら議論を進めていた。ただ単にそれぞれの意見を書き出しただけではなく、それを関連付けたり修正したりしながらまとめていったのである。こうした話し合い活動は、一つの授業で成立するものではなく、日々積み重ねられている毎日の授業の賜物であろう。

### 2. 実践して見えてきた課題

まず1点目は、本授業での“根拠”についてである。研究テーマである『「学びのものさし」を更新する姿』は、「考えと根拠を区別し、論理的に説明する姿」であった。では、実際に展開された授業での“根拠”は何だったのであろうか。それは、前述した様な、信長・秀吉の天下統一に関わる基本的な歴史的事象であった。すなわち、ポルトガル人、南蛮貿易、キリスト教、火縄銃、鉄砲等を“根拠”として、本授業の問題である「なぜ尾張の小さな大名であった信長が勢力を伸ばし、その家来である秀吉が天下統一を成しとげることができたのだろうか」を考え、議論し、説明したのである。しかし、史学的な意味での“根拠”は、本来は史資料や考古学的な現物などの一次資料である。子ども達の学習活動は、そうした史資料をよりどころとすることなく展開されていた。こうした学習活動を“根拠”に基づいた学習活動と言えるのだろうか疑問が残るところである。

次に2点目は、子どもの学習成果であるホワイトボードに記された内容の確認と共有化が不十分であった点である。前述の1点目の課題はあったにせよ、本授業の中心的学習活動は、子ども達のグループワークであった。そして、グループ毎にまとめられたホワイトボードの関係図は、まさに子ども達の学習成果の賜物であり、子ども達の思考世界そのものであった。しかし、せっかくの学習成果にも拘らず、時間の制約で全てのグループが取り上げられることなく、またその吟味も不十分であった。本授業では、トゥールミンモデルによる子どもの解釈を重視しているにもかかわらず、その解釈が可視化されているホワイトボードを子ども達に十分に説明する時間もなく、また十分に吟味する時間も確保されなかった。この点は、研究テーマの上からも大きな課題である。

最後に、3点目は歴史の時系列的流れについてである。当然ながら歴史は時系列的流れをもって展

開される。しかし、今回の授業の場合、基本的な歴史的事項そのものは単体として抑えられてはいるものの、それらの時系列的関係が十分に抑えられていなかった。“なぜ”を解き明かすポルトガル人、南蛮貿易、キリスト教、火縄銃、鉄砲等の歴史的事項は、それぞれ個別に発生した事項ではなく、歴史の流れの中で展開されてきた事項である。“なぜ”といった因果関係を解き明かす時、そうしたそもそも時系列的展開を踏まえる必要がある。しかし、今回の学習活動の場合は、そうした歴史の流れはあまり踏まえられておらず、事項同士の関係性を考察する学習活動が中心となっていた。こうした時系列的思考と因果関係的思考は、「歴史の見方・考え方」の基礎となるものでもあるので、実際の学習活動においては意識されなければならない点であろう。さらに、信長と秀吉による天下統一は、いわば時代の変革期であり画期であった。それは、時代の大きな転換期であることを示している。中学校の歴史的分野の学習では、学習指導要領に“時代の大きな流れ”を把握する重要性が明記されている。本授業は、小学校のものではあるが、時代の転換期にあたる単元においては、そうした“時代の大きな流れ”、前時代との違い、時系列的流れを踏まえつつ、子ども達の学習活動が工夫される必要があったのではないかと。

いずれにしても、問題提起性があり、見どころの多い授業であった。そのことは、意見交換においても活発に議論されたことからもうかがえる。研究主任でありながらの授業は殊の外大変だったと思うが、授業者の今後のさらなる取り組みに期待したい。

## 「戦国の世の統一について解き明かす」から授業改善の在り方を考える

### 1. 本研究の位置付け

教員は授業の場を通して児童と向き合うなかで、日々、授業改善に取り組んでいる。附属学校でも公立小学校と同様に、目の前にいる児童の課題として浮き上がってきた問題から研究課題を取り上げ、実践授業を通じた形で授業改善が行われてきた。今回の授業は鈴木教諭作成の別紙にあるとおり、「(1) 考えと根拠をつなぐ理由付けを吟味する」・「(2) 異なる立場で、視点をつなげて考える」の2点の提案から成り立つ。この2点が児童にとっての課題と位置付けられるために、社会科部での授業改善に取り組んだものである。

社会科教育学では今回の研究テーマに挙げられた(1)及び(2)は重要な論点として取り込まれてきたものであり、社会認識形成の課題点を明確に示している。いささか古い論文ではあるものの島根大学の加藤(2005)によれば、「(小学校4・5年)時期が組み込み型への移行期」とされ、「情報を統合する授業展開が適した時期であるとともに、社会認識発達の質的転換点」であるとしている\*1。同論文はその対象を「地域の商店や商店街」単位における情報の統合がメインであったが、当然に小学6年生における歴史の授業でも「情報を統合する」という観点が重要なものであると言える。今回の鈴木教諭の指摘である(1)と(2)は現代的な視点で着目するならば、現在取り組むべき課題として考えられている協同学習の延長線にあると言える一方で、古くから研究されてきた「社会認識形成」はいかなる発達段階を遂げるのかという視点を含んでおり、以前から追究されてきた課題と現代的な課題の双方を含んだ課題設定となっている。

### 2. 本授業について

本授業では学習課題を「尾張の小さな大名であったのにもかかわらず織田信長が勢力を伸ばし、その家臣である豊臣秀吉が天下統一を成しとげることができたのはなぜか。」と定めた。その観点として、授業内では内政(政策・外交)や外交の出来事を提示し、児童たちは歴史に関わる因果関係を予想し、その上で児童の頭の中で『情報の整理』が目指されたものである。『社会的事象の見方・考え方』には因果関係や相関関係を意図しているものもあると思われるが、どの程度までその理解ができるのかは、社会科教育でも合意が難しい部分がある。小学生の段階であるから資料解釈はある程度自由にすればいいという視点では歴史を学ぶ意味・異議を問われかねないし、小学生でも歴史学の成果を発揮しなければならないという視点では、児童の学びに自由がないという課題が出てくるだろう。日々、そのような悩みと格闘する小学校教員も少なからずいるのではないだろうか。ただ、この授業に関しては事項間の繋がりを意識して、歴史的な見方や考え方を獲得しようとする姿が見られた。鈴木教諭が研究の実践で示しているところに寄れば、児童たちの考え方を補強したり、政策の繋がりを見いだしたりする姿が記述されている。これらの姿は、初めて歴史を学ぶ児童にとっても情報の繋がりを見いだせたものだと言えるだろう。「異なる立場同士での話し合いがきっかけとなり、戦国の世が統一されたことについての視点をつなげて考え、自分たちなりに解き明かした」の一文が、小学生の豊かな学びの実現が結実しているように感じる。

### 3. 今後の研究をつなげるために

この研究をさらなるものにするためには、研究手法の工夫が必要になるであろう。先述の加藤研究によれば事前テスト・事後テストが行われ、子どもの社会認識の構造化を明らかにしようとしている。一方で、歴史的な学習のように小学校ではじめて学ぶ学習素材では、その手法が取りにくい。子どもの社会認識形成を示す意味でも、どのような思考プロセスが生まれたのかを忠実に示すためには、途中に行われた思考ツールや文章などを丁寧に追いかける必要があると考えられる。附属学校の今後の研究を考えた場合、これらの途中経過と教師の働きかけの関係を明らかにすれば、公立学校にむけた情報発信も強力なものになると思われる。

\*1加藤寿朗(2005)「子どもの社会認識発達とその形成に関する実験・実証的研究－小学校社会科単元『地域の商店や商店街』を事例として」、『日本教科教育学会誌』27巻4号、pp.1-10